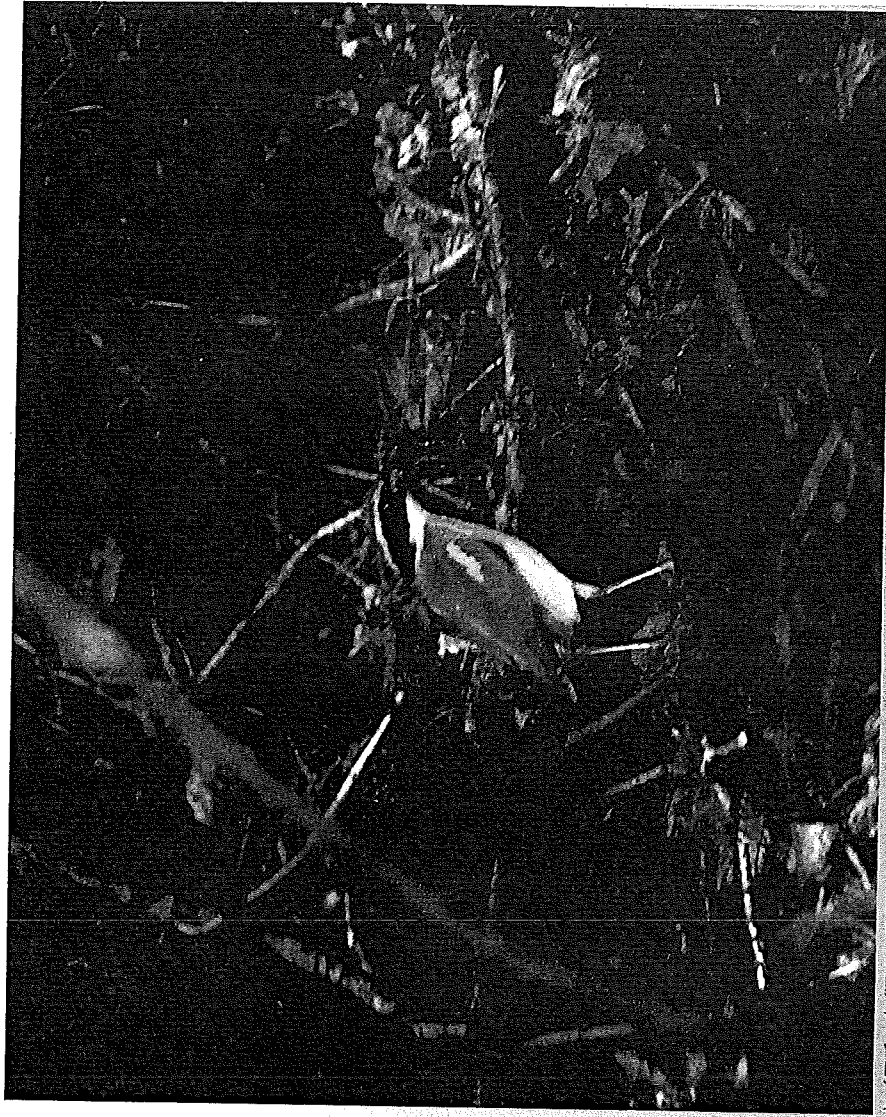


貸出用

高知県レッドデータブック〔動物編〕

— 高知県の絶滅のおそれのある野生動物 —



ヤイロチヨウ (露田佳長撮影)

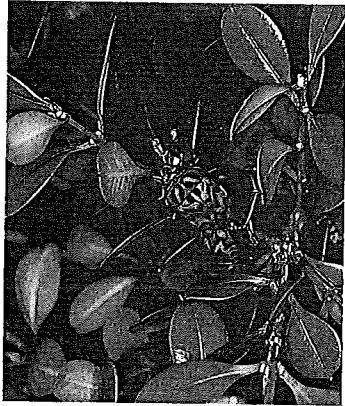
2002

高知県レッドデータブック〔動物編〕

高知県の絶滅のおそれのある野生動物



2002



ニシキニンカンムムシ (中山謙一撮影)

ハッチョウトンボ

(昆虫類)

Nannophya pygmaea

トンボ目トンボ科
高知県評価：絶滅危惧 I A 類 (CR)
環境庁評価：なし

[選定理由] 高知県下での生息地は以前きわめて局地的に点在していた。東洋町甲浦、安田町和田、神峰寺、安芸市伊尾木であった。しかし現存するのは伊尾木のみである。

[形態] 腹長10~14mm、後翅長13~15mm。若い雄は黄橙色で腹節に縞模様があるが、成熟すると赤橙色になり、腹部の縞模様は消失する。胸の側面に黒い縞がある。翅の基部は大きく橙色にけぶる。雌の体は黄色の地で、胸の側面に太い黒帯があり、腹部には縞模様がある。成熟してもあまり体の色は変わらない。

[生態と分布] 平地から山地にかけての日当たりの良い、草丈の低い浅い湿地に生息する。雄は湿地内の草に止まり、雌が来ると交尾し、雌を捕捉したらリングになって付近を飛んだり、草に止まったりして1分間ほどの交尾をする。交尾を解くと雌は単独で打水産卵をし、雄はそれを警戒する。尾瀬ヶ原のような広い湿地帯でも局地的に点在生息する。分布は本州、九州では局地的に生息が見られるが、四国では少ない。高知県での生息地は現在伊尾木のみである。国外ではアジアに広く分布する。

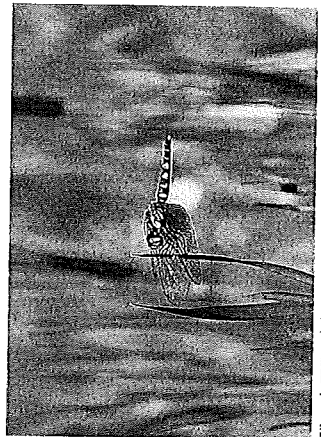
[現状と保護対策] 甲浦は圃場整備のために絶滅した。和田、神峰寺は湿地が荒れて生息しなくなった。伊尾木だけが残された唯一の生息地であるが、湿地が次第に隠蔽されつつあるのでいつまで生息できるかわからない。

[特記事項] 本種のようにあまり移動性もなく、限られた狭い場所で生活するものについては、人手を入れて整備、保護をすることも可能である。

[引用文献] 1), 10), 11), 12), 13), 85)



雄、安田町 (濱田、1992年7月)



雌、安田町 (濱田、1992年7月)

(濱田 康)

ルリボシヤンマ

(昆虫類)

Aeshna juncea

トンボ目ヤンマ科
高知県評価：絶滅危惧 I A 類 (CR)
環境庁評価：なし

[選定理由] 北方系のトンボで、寒冷な湿原や挺水植物の豊富な池に生息する。高知県ではこのような環境は一般には見られない。三嶺の頂上近くにある小さな池付近が、本種の唯一の生息地であり、個体数も少ない。

[形態] 後翅長45~55mm、腹長49~58mmくらいの大型のヤンマ。翅胸前面の黄緑条は明瞭、翅胸側面には太い黄緑条が二本あり、腹部には中央と後端に斑紋がある。翅鞘色と黄緑色の星をちりばめたように美しい。雄第10節背面には小突起がある。翅は無斑透明であるが、雌では老熟すると薄茶色に翅全体がけぶる個体もある。

[生態と分布] 北方系の種で寒冷地湿原に生息し、平地から標高1,000m付近まで知られている。成虫は7月中旬から10月上旬まで見られる。若い個体は池を離れて草地の上、林間の開けたところなどで餌食飛翔をする。成熟した雄は池の上などで縄張り飛翔をする。雌は単独で水際の泥や植物の茎などに産卵する。

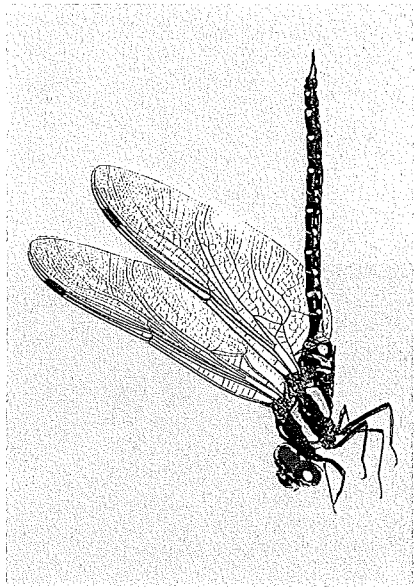
幼虫の期間は寒冷地では卵から成虫になるまでに3年を要し、西日本では2年で成虫になるものもある。

分布は本県では三嶺の山頂付近のみから知られている。国内では北海道、青森県地方では平地でも見られるが、南下するにしたがい山地性となる。中国地方では局地的に生息地が点在する。国外ではヨーロッパ、シベリア、中国東北部、朝鮮半島、千島、カムチャツカ、アラスカ、カナダ、アメリカなどに分布。

[現状と保護対策] 北方系の本種は高知県では三嶺の上まで押し上げられて、頂上付近の池のみ生息が可能である。池の保全が最も大切である。

[引用文献] 1), 10), 11), 12), 13), 85)

(濱田 康)



雄、長野県産 (濱田、1981年8月)

メダカ

(魚類)

Orizias latipes

メダカ科

高知県評価：絶滅危惧ⅠB類 (EN)

環境庁評価：絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

[選定理由] 水田地帯では圃場整備や水路の改修、農薬などにより、都市部周辺では市街化や河川改修により、生息場所を失うかまたは環境が劣化して著しく減少した。さらに、都市部周辺では外来種のカタヤシ (タツブミノ) との競合も生じた。本種は塩分、水温、汚濁に対する耐性が強く、各種の実験によく使われるが、高知市内のほとんどの水域はその限界を超えており、IA類 (CR) 指定に相当する可能性もある。

[形態] 最大全長4cmの小魚で、背鰭6軟条、臀鰭15~21軟条、胸鰭14軟条、腹鰭7軟条である。側線鱗数は29~33枚。体は淡い黄色みを帯びた灰褐色で、背中線は暗褐色、全身橙色や白色のものなど変異も多い。雄は背鰭の縁辺に深い切れ込みがある。また、雌よりも臀鰭が高く (大きく)、腹鰭は小さい。カタヤシとは臀鰭が大ききことで区別できる。

[生態と分布] 本種は河川下流の緩流部、溜池、用水路、水田や水田の導・排水溝などで最も普通にみられた。顕著な昼行性の魚で、薄明時に活動を開始し、日中は岸近くの浅所で水面近くを群泳し、夜間はやや深みか草の間で休止する。主として動物プランクトンを捕食し、ときには植物プランクトンも食べるが、底生動物はほとんど利用しない。産卵期は水温が18℃以上となる4~10月で、この間に同一の雌が2~3回産卵する。体内卵数は500



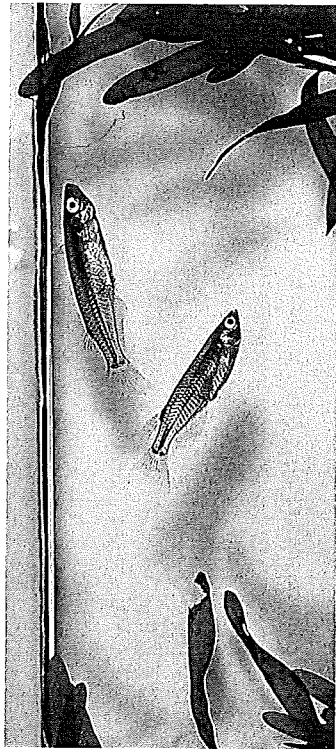
群れ、高知市産 (岡村、2000年)

~800粒であるが、1度の産出卵数は2~50粒である。卵は直径1.2mmの球状で、多数の付着糸がある。雌は産卵後しばらくは生殖孔付近に卵塊を付けたまま遊泳し、その後水草などに付着させる。水温18~25℃では10~20日で孵化し、全長2.5cmくらいで成熟する。生まれた個体は同年の産卵期の終わりころ、成熟個体として産卵に加わる。寿命は普通1年で、まれに2年。初産までの時間が短いということは、水田や用水のような変動が大きい環境で、本種が雑草のように生きのびてこれた大きな要因のひとつである。

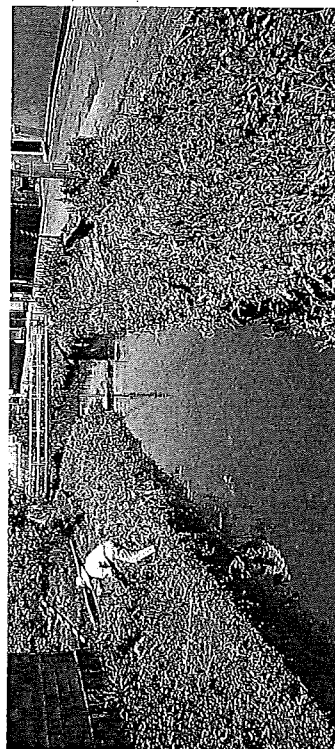
日本から朝鮮半島、中国大陸、台湾に自然分布する。北アメリカでは移植されたものが野生化し、自然繁殖している。国内では本州、四国、九州に広く分布しているが、北海道のものは移植によるものであり、沖縄のメダカも移植の可能性が高い。

[現況と保護対策] 近年の河川改修などでコンクリート護岸となり、用水路は三面張りとなつて、いずれも直線状で緩流部を失っている。また、水田の導・排水溝や畦さえもコンクリート化された。さらに、市街地周辺は埋立てなどによる宅地化が進行し、メダカの生息地が失われ、環境が劣化し、分散と往來の経路が分断された。今後はこれらに配慮した設計、材料の選択、工法の採用が必要である。

[引用文献] 1), 8), 9), 11), 12), 13), 15), 17), 22), 23), 29), 32), 37), 41), 42), 47), 55) (岡村 収)



上、雄; 下、雌 (岡村、2001年)



高知市内にわずかに残る生息河川の一つ (岡村、2000年)